

2005年4月に発足した「環東シナ海海洋環境資源研究センター」が設立1周年を記念して、環境と資源の保全を訴える市民講演会を開催しました。題材をガラパゴスとするユニークな企画で、メディアでも取り上げられました。当日は講演会の他に、現地の自然・生き物・人などを紹介するパネル展示も開かれました。

環境と資源の保全に向けて  
—生物多様性の宝庫・ガラパゴスを例として—

長崎大学環東シナ海海洋環境資源研究センター設立1周年記念市民講演会

ガラパゴスは言うまでもなく「生物進化論」発祥の地です。特有の自然環境に適応して様々な生物が独自の進化を遂げていることは多くの人々が知っていることです。しかしながら残念なことにこの特異な自然と生態系が人間社会の発達によって危機に直面しています。それは環境資源としての自然、食糧資源としての海洋生物の危機であり、それらを含む生態系存亡の危機ともいえます。

「地球」を次世代に引き継ぐために私たちは何をすべきかをガラパゴスから発信される情報を基に考えて見ましょう。

主催：長崎大学環東シナ海海洋環境資源研究センター、  
長崎大学水産学部  
後援：長崎大学国際連携研究戦略本部、NPO 法人日本  
ガラパゴスの会

開催日時：3月11日（土曜日）午後1時～5時  
開催場所：長崎大学総合教育研究棟多目的ホール

内容：

- ・ 基調講演  
「ガラパゴスはなぜ世界遺産になったのか」  
伊藤修三  
(長崎大学名誉教授・日本ガラパゴスの会会長)
- ・ ガラパゴス環境保全の今； Mr. Rueda O. Danny  
(ガラパゴス国立公園局主任調査員)
- ・ 特異なガラパゴスの海洋環境； 中田英昭  
(長崎大学水産学部教授)
- ・ 豊かなガラパゴスの海洋生物； 三矢康彦  
(長崎大学名誉教授)
- ・ あえぐガラパゴス一人と生活； 松岡数充  
(長崎大学環東シナ海海洋環境資源研究センター教授)
- ・ ガラパゴスのエコツーリズムと環境教育； 西原 弘  
(サステイナブル・デザイン研究所代表)



ガラパゴス諸島に生息する  
ウミイグアナ（1999  
年、松岡センター長撮影）

## 環境と資源保全訴え講演会

長崎大環東シナ海海洋環  
境資源センター（長崎市多  
良町）は設立一周年を記  
念して、十一日午後一時か  
ら、同市文教町の同大総合  
教育研究棟多目的ホール  
で、「環境と資源の保全に  
向けて―生物多様性の宝庫  
・ガラパゴスを例として―  
と題し講演会を開く。現地  
の生物や人々の生活を撮っ  
た写真展やビデオ上映もあ  
る。入場無料。

### 11日に長崎大 ガラパゴス諸島テーマ

南米・エクアドルのガラ  
パゴスはなぜ世界遺産にな  
ったのか」と題して基調講  
演。同大教授陣ら五人が現  
地報告を交えて発表する。  
松岡数充・同センター長  
（沿岸環境学）は「生物進  
化のプロセスを残すガラパ  
ゴス諸島の沿岸海域と比較  
することで、東シナ海の海  
洋環境と生物資源の在り方  
を考えてみたい」と話して  
いる。問い合わせは松岡研  
究室（電095・819・  
2812）。

当日は、特定非営利活動  
法人（NPO法人）日本ガ  
ラパゴスの会会長の伊藤秀  
三・同大名誉教授が「ガラ

平成18年3月9日(木)付け 長崎新聞

「大村湾再生研究協議会(横山哲夫会長)」主催講演会

開催日: 平成 17 年 9 月 21 日

講師: 小林信之 (長崎大学大学院教授)

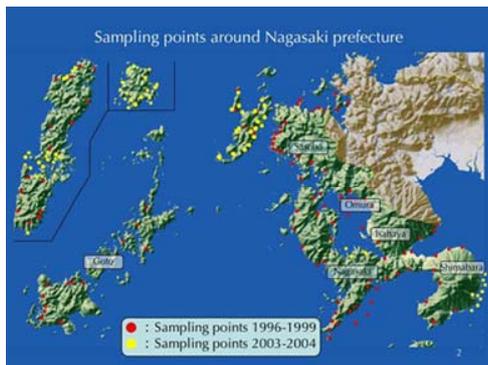
演題: 微生物群集構造解析による環境変動の評価

**講演概要** 五島、長崎半島、橘湾、諫早湾、大村湾の5つの海域の海泥から1997年に採取された海洋微生物で構成される海洋微生物ライブラリーを用い、16SrDNAの塩基配列解析により細菌の同定およびその群集構造を解析した。

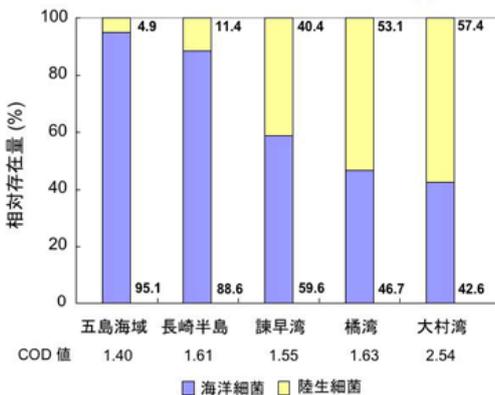
その結果、海域に存在する微生物を中心としたAlpha-またはGamma-proteobacteriaが、全体の細菌に占める割合は、開放的な海域である五島、長崎半島のそれぞれにおいて71%と58.4%を示した。閉鎖的な海域である大村湾、橘湾、諫早湾においては、それぞれ25.2%、28.2%、43.2%であった。

一方、陸域からの流入が中心であると考えられるBacilliの組成は大村湾、橘湾、諫早湾においてそれぞれ、64.5%、62.3%、29.7%であった。これに対し、五島や長崎半島のそれぞれの海域では4.8%と0.0%でした。Bacilliの存在およびその海洋環境における変動は主に地理構造的な閉鎖性と環境汚染

レベルの2つの要因によって影響されると考えられる。従って、従来の環境評価指標であるCODやBOD法に比べ、海洋環境におけるBacilliと海洋性細菌の組成変化は新しい海洋環境変動の評価法として用いる可敵性が示唆されました。



長崎県近海の微生物群集構造 (2)



## 大村湾の水質悪化

長崎大学大学院 教授 報告 海洋性微生物わずからずか

海中の微生物を分析して環境の状態を調べる研究に取り組んでいる小林信之・長崎大学大学院教授(ウイルス学)の講演会が21日、同大学で行われた。大村湾では海洋性の微生物がほとんど確認されず、水質が悪化していると報告した。

講演会は、大村湾の環境浄化に向けて政策提言などに取り組んでいる市民団体「大村湾再生研究協議会」(長崎市、横山哲夫会長)が主催し、会員ら約30人が参加した。

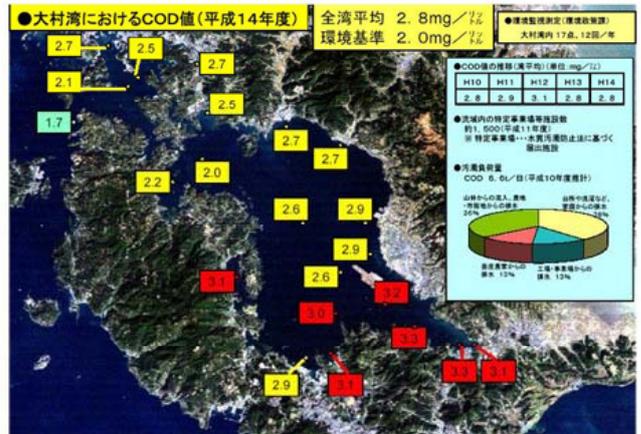
小林教授は、996年から2004年にかけて、大村湾のほか、五島沿岸や諫早湾など県内五つの海域で微生物を採取し、分析した。

五島沿岸では、採取したうちの約70%が海洋性の種類だったが、これに対し、大村湾では、海洋性はわずか6.4%にとどまり、陸性が76.6%に達した。小林教授は、同湾が周囲を陸地で囲まれ、海水交換が十分に行われない「超閉鎖性海域」で、微生物が陸地から流入しているのが原因と推測した。

また、97年に因営諫早湾干拓事業の潮受け堤防によって閉め切られた同湾の環境変化についての報告もあり、閉め切り後は堤防内外で海洋性微生物が激減していると説明。「微生物は増殖が速い。これを指標にすれば短時間で環境の変化を確認でき、迅速な対応が可能になる」と、微生物を利用した環境評価方法の有用性を強調した。

微生物を利用して環境変化を分析する研究について報告する小林教授

平成 17 年 9 月 25 日 読売新聞



http://www.pref.nagasaki.jp/kankyol/

各採取地点における微生物群集構造

